

岩手県九戸郡大野村における活動を通じた  
地方小都市のまちづくりに向けた将来ビジョンと具体的提案に関する研究  
—その3— 中心部のにぎわい再生に向けた大野地区への提案

大野村 西大野地区  
マーケット まちなみづくり

正会員 ○遠藤新\*2 北澤猛\*3  
池田晃一\*1 宮本裕太\*1  
安藤真理\*1 阿部大輔\*1  
田中大朗\*1

### 0. はじめに

前稿までにひきつづき、ここでは村の中心部である大野地区に対する賑わい再生のための提案を概観し、次年度以降のまちづくりのあり方について考察する。提案はワークショップなどを通じて地元住民と意見交換する中で徐々に進化・統廃合した。提案の柱になるのは1)「西大野地区」の改編、2)マーケットの復活を軸とする「まちなか回遊」の回復、3)中心部のまちなみづくり、の三点であり、これらは議論を通じて徐々に肉付けされて具体的になった、いわば「重点プロジェクト」である。以下、この3つを概観する。

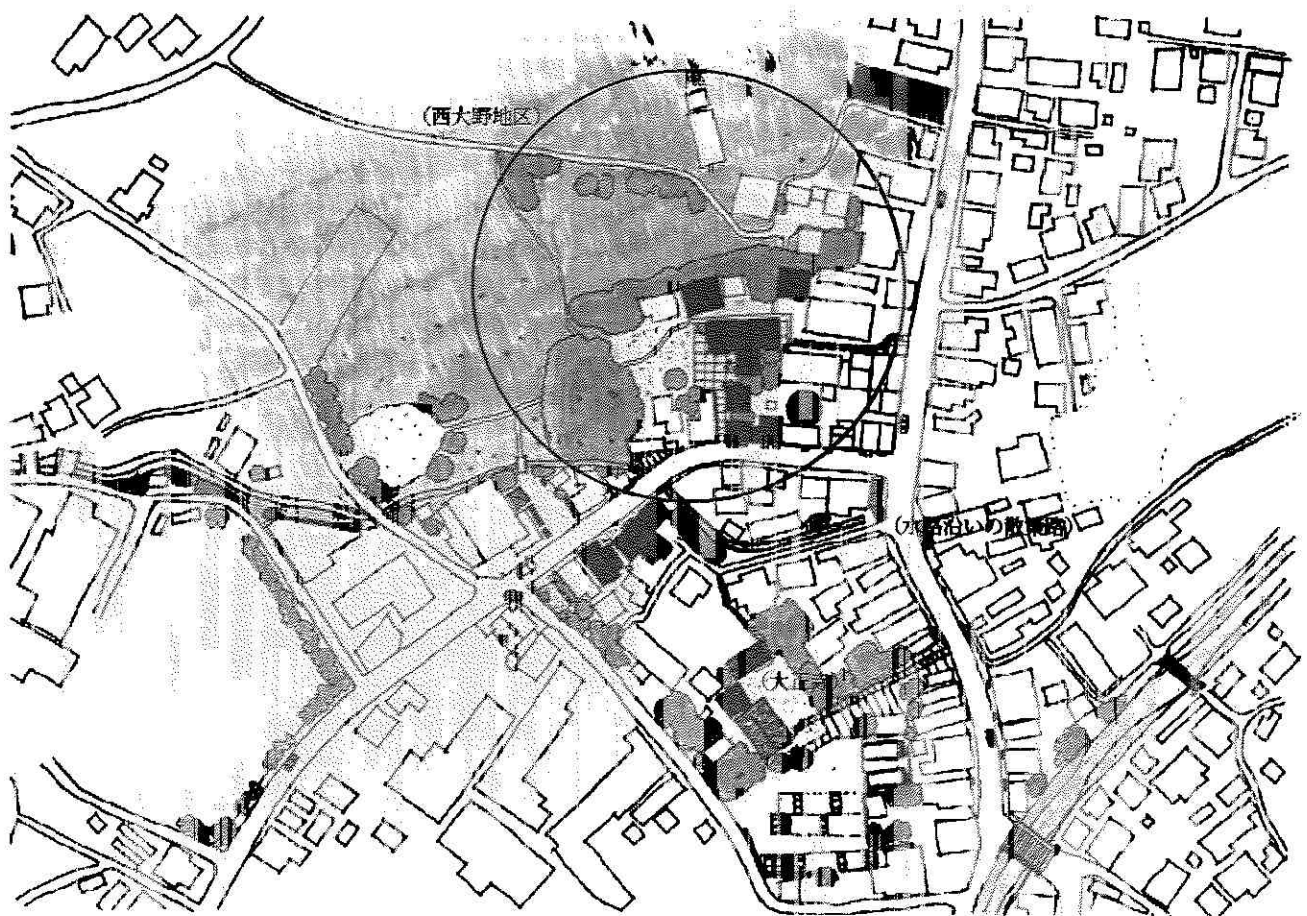
### 1. 提案の概要

提案は64のアイデアによって構成される。それを「広域」(キャンパスビレッジ)と「まちなか」(大野地区)の二つに整理して、提案した。

#### 1) 「西大野地区」の改編

T字路の角地に面した北西の敷地(通称「西大野地区」)にたいする提案。この敷地この敷地は村で一番の大事主が所有し、使われないままの立派な蔵が数件残されている。

## 大野まちなか 100景 ~まちなかへの提案~



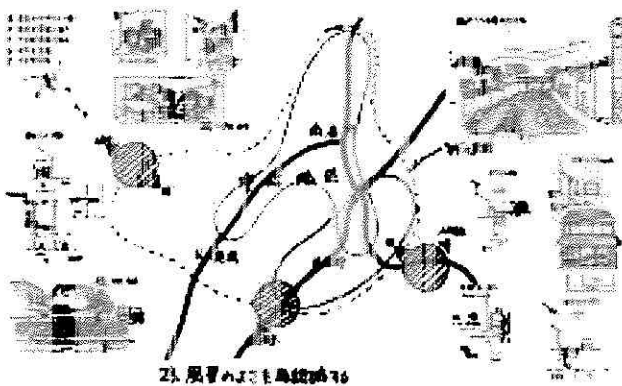
Study on The Future Visions and Concrete Proposals of Community-Planning In Local City : A Case in Onomura  
Part 3 : How to Understand City and Extract Problems for Community-Planning

ARATA Endo et al

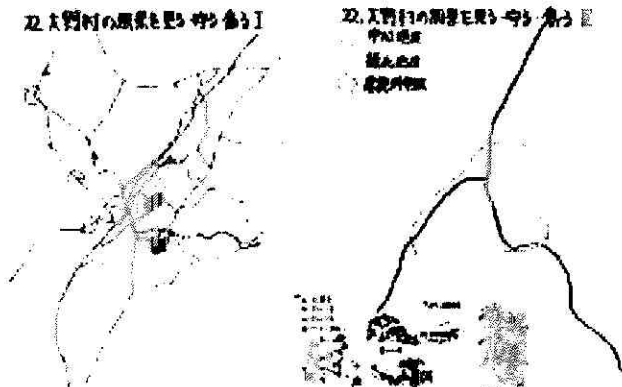
裏側には広大な空き地が広がる。そこで、この地区に対しては、敷地の開放、蔵の活用（レストラン、バー）、観光インフォメーションセンター、歴史博物館、ミニ映画館、などといった、拠点的な賑わい施設となるような、様々な機能が複合した空間づくりを提案した。

## 2) マーケットの復活、まちなか回遊の回復

T字路から西側は、かつて「マーケット」と呼ばれていた。その名の通り市場が所狭しと建ち並ぶ場所であった。ワークショップでも、往時のこうしたにぎわいが町中にふさわしい、とする意見がかなり出された。そこで、現在も「5のつく日」に細々と続けられている「市」を、かつての「マーケット」の場所で集約して行う、西大野地区の沿道にある建物のセットバックによるオープンスペース確保、建物には「商工会」の事務所移設（現在はデザインセンターにある）、仮設の飲食店舗、等を提案した。こうして発生する人の流れを、まち中に回遊させるため、西大野地区を通じてうらの野原への通り抜け道の確保、西大野地区と反対の南側一角を通過する水路沿いの散策路、同じ一角にあって移転問題が浮上している大正寺の敷地を遊び場開放、といった提案をおこなった。西大野地区の野原や水路沿いの散策路はいずれも、地区周囲の農地へと続く。農地には豊かな田園風景が広がり、散策するにはとても快適な空間である。



21. 風景へよき鳥籠のつら



22. 大野村の風景を思いやりあう

23. 大野村の風景を思いやりあう

## 3) 中心部のまちなみづくり

大野地区の中心部には空き家が多く、維持管理されていない歴史的な建物が多い。また、公共施設についても、コミュニティ消防センター（コミュニティ施設+消防詰め所）が平成12年度事業実施、また、街灯の整備、歩道の整備、橋の架け替え、等の事業が村役場内で検討されていた。このように、中長期的にはまちなかの建物や公共施設などを再整備する可能性は高いので、街路沿いのデザインガイドライン設置、あわせて地区周辺の風景計画、等を作成するよう提案した。なお、コミュニティ消防センターは平成13年度3月に竣工した。この施設のデザインについては、将来のデザインガイドラインの内容を見込んだイメージを研究室から提案した。これにより、役場と設計業者、研究室の3者で協議しながらデザインが進められ、町並みに調和したデザインが実現された。

## 3. 今後の課題

これまでの進め方は、我々「よそのもの」が、行政のバックアップをもとに、村のポテンシャルを探しながら「住民に対して提案」をするスタイルが中心であった。しかし、まちなかでのコミュニティ消防センターの完成により、「町並みに配慮したデザイン」の共通認識が、役場の人や周辺住民との間で共有されはじめたことで、まちづくりが住民の間にも意識化されつつあるようである。今後は住民側からの積極的な取り組みが期待される。検討すべき具体的アイデアとテーマは、十分に出されているので、今後は彼らが持続的にまちづくりの協議と実践を続けていけるような場づくりと必要な専門知識のサポートなどに取り組む必要がある。また、更に多くの住民などが今後也能かできるように、個々の提案を「まちなか再生の計画」「まちなみづくりのガイドライン」としてまとめておくことが次のステップとして必要である。



(完成したコミュニティ消防センター)

- ・隣の町家に合わせた屋根勾配、2階のファサード、外壁などの色。
- ・扉を格子戸にして、消防車の様子が見えるようにした。

\*1 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程

\*2 東京大学大学院工学系研究科 助手

\*3 東京大学大学院工学系研究科 助教授

Graduate School, Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering Univ. of Tokyo  
Associate Prof., Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering Univ. of Tokyo  
Assoc. Prof., Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering Univ. of Tokyo